

多くの子どもたちの笑顔につながる「わいわい文庫」

元岐阜特別支援学校 教諭
神山 忠

はじめに

私には、文字を処理することが苦手という特性があります。障害名でいうと「ディスレクシア」と言います。そんな私は幼少期から、読書ができないことでふがいなさを感じてきました。しかし、DAISY図書との出会いで世界は一変しました。読む楽しさだけでなく、新しい知識に触れる楽しさ、その知識や感じたことを他の人と交流する喜びを、大人になって初めて知りました。(DAISYとは、デジタル書籍の書式・フォーマットの一つです。読み上げ機能をはじめ、いろいろな機能があり、多様なニーズに応えられるフォーマットです。現在は改善が図られ、EPUBに置き換わりつつあります。)

子どもたちとDAISY図書

DAISY図書がよく知られるようになった背景には、2008年に成立した「教科書バリアフリー法」があります。

それまでは、紙の教科書しか提供されない体制でしたので、視覚に障害がある子どもたちは、点字の教科書を利用したり、大きな文字の教科書(拡大教科書)を利用したりしていました。そ

の重さと量は、きっと体験してみないとわからないくらいの膨大なものです。

また、視覚以外に障害がある子どもたちは、通常の教科書しか使えませんでした。それにより、自分でページ操作ができない子、文字を認識することが苦手な子、音読することが苦手な子、自分で読んでも内容が思い浮かべにくい子などは教科書にアクセスできませんでした。しかし、「教科書バリアフリー法」によって、自分にあった読書が可能になり、教科書のデジタル化が実現しました。

法案は成立しましたが、課題は山積していました。たとえば、教科書のデジタル化は、現在もボランティア団体が行っています。出版社が発行しているわけではありません。

また、現場の教師も具体的にどんな形式の教科書が提供されるのか、どのようにすれば提供できるのかなどの理解がなかなか進みませんでした。

法案成立後3年ほどがたち、DAISY図書もやっと広がりが見られるようになりました。そして、必要な子どもたちに届けられるようになると、子どもたちから、「勉強が楽しくなった!」「学校が面

白くなった！」などの声が聞かれるようになりました。その反面、「教科書以外の読み物はないの?」「こんなに楽しいもの、もっと小さいころから使いたかった!」などの声が各地で聞かれるようになりました。

わいわい文庫の登場

DAISY教科書を使った子どもたちからの要望に応えるかのように登場したのが「わいわい文庫」でした。教科書以外の読み物に触れられ、笑顔に満ち溢れた子どもたちと何人であったことか。自分が主体的に操作し、自分のペースで書物にアクセスできる素晴らしさを、子どもたちの姿から実感できました。

子どもたちだけでなく、支援者にもこうした読書の方法があることを周知できることにつながっていました。それまでは、読書といったら紙の本を読むものと思い込んでいた支援者が、多様な読書のスタイルがあることに気づけるコンテンツとなりました。

そして支援者は、子どもたちがより主体的に読み物にアクセスできるようリーダーソフトの設定を、子どもたちとともに探ることができました。そうした子どもと支援者との営みを見ていると、読書自体が子どもたちの笑顔につながっているのはもちろん、自分のために支援者が寄り添い、共に歩んでもら

えているという実感や安心感を得られることでも、笑顔につながっているのだと感じました。

国際的な動き

2013年、モロッコのマラケシュで行われた世界知的所有機関会議において「障害種に捉われないでアクセシブルなフォーマットで知的所有物にアクセスできるようにしましょう」と決まりました。いわゆるマラケシュ条約の採択です。

また国連は、2015年に各国首脳によるサミットを開催して「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択し、「持続可能な開発目標」(SDGs)を定めました。その中には貧富、性別、障害等によって不公平が生じないように、公正でみんなに質の高い教育をと盛り込まれています。

マラケシュ条約、SDGsの共通点は、情報への公平なアクセスを保障すること、ユニバーサルな形で提供できる社会にすること、インクルージョンで分けられない社会にしていこうことだと思います。

これは「わいわい文庫」が、これらが採択される前から大切にしてきたことです。必要な人に無償で提供することを大前提にして配布されてきました。また、収録されている書籍も多様なニーズに応じられるように毎回工夫がなされています。そして、リーダーソフトにもより工夫を凝らし、誰でも、どこでも、

どの端末でも無償で読めるような努力をしてもらえています。

大人もみんな子どもだった

もともとこの「わいわい文庫」は、障害のある子どもたちに向けて作られたものでした。しかし、障害のある子どもとそうでない子どもをつなぐ役割も果たしている姿をよく見ます。同じコンテンツのお話の感想を交流する。一緒になって端末をのぞき込み、お話の世界を共有する。それだけでなく、多くの人が読書の多様な方法を知ることにもつながっています。病気や加齢でそれまで紙の本を読めていた方も、事前にこうした書籍へのアクセス方法があることを知っていたために読書をあきらめなくてすんだ方もいます。

「わいわい文庫」が広がることは、障害、病気、加齢なども超越でき、それらを悲観的に感じることなく、笑顔で過ごせる社会につながると思っています。

「わいわい文庫活用術」に掲載されている多くの事例を見てみると、その子だけでなく周囲の人の笑顔にも気づけると思います。障害のある子どもだけでなく、その子への配慮が周囲の人たちの生きやすさにつながることを「わいわい文庫」は教えてくれている気がします。

おわりに

川上邦夫さんが翻訳されたスウェー

デンの中学の教科書に、こんな詩が載せられています。「わいわい文庫」は、この詩の前半の経験を少なくし、後半の経験を積むことにつながると感じましたので紹介させていただきます。

「子ども」

作：ドロシー・ロー・ノルト

批判ばかりされた子どもは
非難することをおぼえる
殴られて大きくなった子どもは
力にたよることをおぼえる
笑いものにされた子どもは
ものを言わずにいることをおぼえる
皮肉にさらされた子どもは
鈍い良心のもちぬしとなる
しかし、激励をうけた子どもは
自信をおぼえる
寛容にであった子どもは
忍耐をおぼえる
賞賛をうけた子どもは
評価することをおぼえる
フェアプレーを経験した子どもは
公正をおぼえる
友情を知る子どもは
親切をおぼえる
安心を経験した子どもは
信頼をおぼえる
可愛がられ抱きしめられた子どもは
世界中の愛情を感じ取ることをおぼえる

『あなた自身の社会—スウェーデンの中学教科書』
(アーネ・リンドクウィスト、ヤン・ウェステル 著、
川上邦夫 訳、新評論) 「子ども」より引用